

現地報告

チボリ女性の伝統ハウス完成！

8月26日はCOWHEDの新たな一歩が始まった日でした。伝統ハウスの竣工式が行われ、リゾート地に建物をという長年の夢が実現しました。

私たちが到着した時、建物の前に民族衣装を着た組合員、その子どもたち、招待客らが集まっていました。入り口には、ティナラク織の大きな造花が真ん中についたテープが張られており、九島さんと私がテープカットをさせて頂き、最初に建物の中に入りました。真っ暗でしたが、すぐに大きな窓が開けられ、セブ湖と周辺の山々が視界に入ってきました。青と緑が織りなす、美しい、心和む景色でした。この地の利を生かして建物をと願っていた理由がよくわかりました。

組合員の民族楽器の演奏で祝典が始まり、町長、助役、観光課長、エコ・ツーリズム協会会長、南コタバト州観光局長などの来賓が、口々にこの建物がレイクセブ町の観光の拠点の一つになり、レイクセブ町の、南コタバト州の観光産業に大いに寄与するとの期待の祝辞を述べました。

最後の観光省の役人の祝辞は特に印象的でした。レイクセブ町の観光地としての強みは、美しい湖、滝などの自然景観だけでなく、チボリ民族の存在があるということを強調し、より一層民族の伝統継承に力を入れてほしいと述べ、当会への感謝の言葉で結ばれました。

昼食後は、モンキーダンスなども始まり、組合員は、大いに笑い、楽しい時を過ごし、その後、今後の活動に関する会議を開きました。

念願の建物はできたものの、人材不足、資金不足の問題は依然あり、希望通りの活動を行うには、組合員が今以上に団結し、各々の力を発揮する必要があります。次の目標に向け頑張してほしいものです。(相田)



ニッパやしの屋根、竹の壁、大きな間取り。

チボリの伝統家屋様式による伝統ハウス

(この支援には松尾建設基金を充当させていただきました)

車いすがもたらしたもの

PIHSが札幌に事務局のあるNPO「飛んでけ！車いす」の会に車いすを依頼し、調達してもらえたので、8月訪問時、子ども用車いすを一台運びました。このNPOは、日本で使われなくなった車いすを寄付してもらい、整備後、アジア・アフリカの必要な人たちに使ってもらう為、旅行者に運んでもらうという活動をしています。

成田空港の宅配カウンターで車いすを受け取り、心配していたマニラ空港の税関では、何も尋ねられることなく、無事フィリピンに持ち込むことができました。

PIHSの責任者ナプサさんと車いすを使用する子の家を訪ねました。薄暗い家の中にバイバイちゃんという愛称のやせ細った4歳の女の子が床に横になっていました。生後6ヶ月の時に、高熱を出し、脳膜炎を患い、その後も体調が思わしくないものの、貧困故に医者に見てもらうこともできないとの事。

夫を亡くした母親が生活の糧を得ねばならず、バイバイちゃんをかまっていられない時間がないのと、どう接してよいかわからないという理由で、いつも寝かされているということでした。

しかし、一週間後、母親は毎朝車いすにバイバイちゃんを乗せて散歩するようになったという報告をもらいました。ナプサさんは、**車いすが母親の意識を変えた**と言っていました。

同じ村に車いすが必要な4歳の男の子もいました。この子は盲目というハンディも負っていました。母親はその子を常に抱いているので腰痛になったとの事。また別の村を訪ね、9歳の女の子にも会いました。この子は訓練次第で自分で車いすを動かせるのではと思われました。

今後は現地訪問の際、毎回車いすを運ぶことになりそうです。

(相田)



太陽の光を浴びるバイバイちゃん

「飛んでけ！車いす」の会の活動に興味のある方は、ホームページをご覧ください。

<http://business4.plala.or.jp/tondeke/>